

# フィンランドにおける子どもの育ちを支える教育事情

## —ネウボラとエシコウルにみる就学前期を継続的に支えるしくみ—

吉 川 はる奈

埼玉大学教育学部家政教育講座

尾 崎 啓 子

埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

細 瀬 富 夫

埼玉大学教育学部特別支援教育講座

キーワード：フィンランド、ネウボラ、エシコウル、継続的支援、子どもの育ち

### 1. はじめに

筆者らは2013年9月にフィンランドの子どもの育ちに関わる機関において、保育・教育場面の視察とインタビューを行った。具体的には、出生前～乳幼児期の子どもとその親を支えるネウボラをはじめ保育園、エシコウル（プレスクール）、小学校、中学校、特別支援学校、矯正施設といういわば、成長期の子どもの教育に関わる多様な施設の特徴を整理するとともにそれを支えるスタッフへのインタビューを行うことで、子どもの育ちを支える教育事情について概観することができた。本論はそのうちのネウボラとエシコウルでの結果をもとに整理したものである。

### 2. 妊娠期の母親と誕生後の子どもと家族を継続して支えるネウボラ

#### 2-1、ネウボラのしくみの継続性の特徴

フィンランドの就学前の子どもと家族を支える相談の場がネウボラである。国の公的な施設であり、具体的には母親が妊娠中から母親の健康とともに子どもの健康、妊娠の経過についてサポートする。子どもが誕生後、就学する前までと長期継続して子どもと家族の健康な育ちを支える無料の施設である。ネウボラとはフィンランド語でneuvolaと記載し、neuvoは情報やアドバイス、laは場所、という意味である。母親の妊娠期から子どもの就学までと、親子の健康をサポートする地域の相談の場である。国の管轄は社会保健省であり、法律と自治体の条例のもとに設置されている。出産までを出産ネウボラ、誕生後の子どもと家族は子どもネウボラでサポートするなど機能を分けて設置する地域もあるが、両方が同じ敷地にあることも多い。1944年に法律に基づきネウボラの設置が義務化されフィンランド全土に広まった。現在のネウボラの利用率は高く、99%を超える。ネウボラは自治体が運営する。まずフィンランド、ビフィティ市のネウボラでネウボラナースと市担当者にネウボラの特徴についてインタビューをした結果について論じる。

##### (1) 利用の継続性

ネウボラは妊娠時からほとんどの母親が相談と健診に通い、子どもが小学校入学まで利用する。妊娠中は健診として、ネウボラナース（保健師）と医師に経過をみてもらう。妊娠中、母親は全部で15回経過観察のため来所する。健診内容は胎児の健康状態のチェックから始まり、遺伝子等の異常有無の確認も行い、必要があれば、医師の診察、検査となる。出産時のみ病院に行くが、誕生後にも継続して親子でネウボラに通い、7年間の間に最低でも計16回ほど来所するという。

初めての来所は誕生後2週間目、1歳になるまでに9回、1歳から小学校入学までに7回という。そのうちで医師が立ち会う健診は最低でも5回あるという。

子どもの健診内容は、身長・体重その他のチェック、発達テスト、家庭状況の確認、夫婦関係の確認などである。また出産直後は、家庭訪問をして、産後の様子を確認する支援を行っている。両親対象の学級や講座も開かれ、妊娠中の注意をはじめ、乳児の世話、子どものいる生活や子どもの健康について学ぶ機会がある。このように親子がネウボラを頻繁に継続して利用するので、自然に同じ時期に出産する母親同士は顔見知りになり、母親仲間へと発展していくという。

## (2) 担当者の継続性

同じネウボラナース（保健師）が継続して家族を担当するので、心配な事柄が起こっても対応がスムーズになされるという。同じ人に継続して診てもらえる、相談にのってもらえる安心感は大い。出産時までに頻繁にネウボラに通い、ネウボラナースと人間関係が構築されている。出産時にはネウボラで妊娠中に経過観察してきた記録、カルテを病院に送付して確実に情報伝達がなされる。出産で病院に入院するのは、通常わずか1～3日程度と日本に比べ大変短い。

ネウボラでの7年間の記録は小学校では、学校保健師が引きつぐ。6歳児の検査結果もすべて、ネットを通じて共有される。もちろん両親が拒否することは可能だが、子どもの状態を伝え適切に対応してもらうためのデータとして、それを拒否することは少ないという。

フィンランドでも育児に不安を抱えたり、イライラしたりする母親はいるが、ネウボラナースによって深刻な事態になる前にキャッチし予防的に対応できているという。万が一SOSの連絡が家族からある場合にも1週間以内に行動を起こす、3週間以内に解決方法を見つけるというルールがある。出産後の指導はネウボラ内のグループで行っていく。見学時にちょうど生まれて2週間という子どもを連れた母親に出会った。子どもの相談の場であるとともに母親の大切な居場所にもなっていて、地域で家族を長期継続して支えるしくみである。

## (3) 地域の子育て支援の拠点機能

筆者らが視察とインタビューを行ったビフィティ市のネウボラは、1階が保育園、2階がネウボラになっている赤煉瓦造り風の建物（図1）であった。ヘルシンキから車で1時間弱と少し離れた所に位置するだけあり、ネウボラ以外の他の施設、学校も周囲は豊かな自然に囲まれていた。建物内は全体が明るい色彩で整えられ、窓も大きく、廊下には掲示物も整理されていた（図2）。

ネウボラについて、昨今日本でも多く取り上げられ、特に平成27年度の子ども子育て支援新制度施行に関連し、妊娠から出産、子育てまでの切れ目のない長期継続した支援のしくみのモデルとして注目が集まった。世田谷区、浦安市、和光市、高浜市、名張市の5つの市町村が日本版ネウボラへの取り組みをモデル事業としては始めるという報告がなされている。



図1 ネウボラの外観



図2 建物内の廊下



図3 診察室



図4 ネウボラナースへのインタビュー



図5 子どもが遊べるラウンジ

ビヒティ市内には3つのネウボラがある。ビヒティ市の人口は約25,000人、子どもは約2,500人（2013年9月時点）である。視察先のネウボラが一番大きいネウボラで、6人の保健師がいる。週2回、医師が診察にくる。1,500人の子ども200人の妊婦をこのネウボラで診ている。

ネウボラナースは妊娠出産子育て期の親と子どもの相談を行うだけでなく、地域の学校等の組織と密接な協力関係を持つこと、子どもの健康管理の面で、家庭が自己決定できるように支援すること、言語治療士、運動療法士、児童保護員、教師、等々と専門家との協力体制を取るなど、いわば地域の子育て支援の拠点機能を果たすよう仕事をしている。

#### (4) 保育園、学校等との連携

ネウボラは保育園とも連携しており日常的に連絡をとる。また学校とも連携し、子どもの状態によっては4歳児健診の結果を伝え、子どもの学業への早期援助につなげている。これらの健診結果や家庭内での子どもの状況、保育園でのその子の活動の様子などをネウボラで把握して早期に対応し、リスク予防の役割を果たしているということになる。

妊婦は月1回定期的にネウボラにきて診察を受ける（図3）。36週までは、2週に1回通う。37週以後は、週1回通う。出産予定日に子どもが生まれないときには、週2回通う。家庭全体に対して、子どもが生まれたときの指導を行う。グループで、夫婦関係、口の衛生、等々について講習形式で開催する。このグループで出産病院を見学に行くこともある。同じグループメンバーで出産2週間後にネウボラに集まる。初産の家庭にはネウボラナースが必ず家庭訪問をする。もちろん家庭は保健師の家庭訪問を拒否することもできる。町の予算や人的都合ですべての家庭を訪問することはできないので対象をしばらく、アルコール中毒、若年者の出産などに家庭訪問をしている。また学校では8年生に性教育を行い、若年層の妊娠を防止するとりくみをするが、これらも地域の子育て支援拠点としてのネウボラによる実態把握と情報共有によるところが大きい。

#### (5) 他機関への着実な引き継ぎ

8割以上の出産で父親が立ち会い、出産後2週間経つと母子はネウボラに通う。母子は7年間ネウボラに通うことになるので、ネウボラナースとは人間関係ができる。図4はネウボラナースと市の担当者とのインタビュー場面、図5は子どもが待ち時間に遊べるラウンジである。来所時には子どもの発達については、目を合わせるか（視線が合うか）確認したり、絵を描く際に、発達状態を見たりする。家庭の状況について、親がアルコール中毒ではないか、夫婦関係はうまくいっているかなど、医師が問診・検診し診断をする。保育園の資料も参考に活用する。就学までに、子どもは5回医師の診察を受ける。一歳未満では頻繁に医師の診察を受ける。これらのいわば丁寧な支援は、子どもの就学後は、学校保健師がこの仕事を引き継ぐ。それまでの資料は学校に送られる。この他機関への着実な引き継ぎを行うこともネウボラの大きな特徴である。



## (6) 学校福祉チームへの参加

フィンランドに児童虐待は少ないが、家庭内暴力はあるという。子どもが21歳になるまでは、自治体が面倒をみて養育する義務がある。優秀な子どもは、自治体の責任で大学にまで進学させることもある。

「学校福祉チーム」には、ネウボラナースも参加する。筆者らがネウボラでインタビューを終え退室しようとしたところ、前年に訪問した中学校の女性校長がやって来たところを、偶然に再会した。同時刻にネウボラで地域のケース会議が予定されていたのである。このようにネウボラナースが「学校福祉チーム」に参加し、逆に、学校の教師もネウボラのケース会議にメンバーとして参加している。親の承諾を得た上で、情報を共有して学校福祉チームとして子どもと家族を支える役割を果たしている。

ネウボラによる住民・妊産婦・子どもの健康管理は、社会福祉・保健のサービスに当たり、地方自治体の重要なサービスになっている。

このように保健・福祉のサービスとして、子どもの健康・生育状態や家庭環境、障害の有無や種別のデータのほかどのように支援を受けていたかが、その後の保育園、エシコウル（プレスクール）、小学校、特別支援学校での教育に生かされる。次にエシコウルについて論じる。

## 3. エシコウル（プレスクール：就学前教育学校）での子どもの育ち

### 3-1、就学前の子どもの学びの場の特徴

#### (1) 保育園に隣接するエシコウル

フィンランドには「景観法」が定められており、周囲との環境の調和を図り、美観を壊す開発や建築は認められない。首都と地方を結ぶ道路網が整備され、開発は進んでいる様子が車窓からも感じ取ることができる。自然の保護と人間の活動の均衡・調和の維持に関心が強く、厳しく制限されているようだ。訪問した保育園、エシコウルも周りに森があり、豊かな自然に取り囲まれていた。保育園はこの地域のいわば中心的な施設である。建物は新しく清潔感を与えるもので、敷地内の整備も十分に行き届いていた。

ヘルシンキ近郊のヌンメラ市にあるランキーラ保育園と隣接するエシコウル（プレスクール）を見学し、職員にインタビューを行った。エシコウル（プレスクール）は、以前は利用者が少なかったが、現在は子どもが学ぶ権利としての意識から利用者は9割を超えるという。ランキーラ保育園としての目指す保育目標は公立なので、他の公立保育園と同じだが、園の独自の方針として、ムーミンを題材にして、さまざまなグループワークをし、グループ内で仲間とのつき合い方を教える



図6 清潔で明るい園内の廊下



図7 父母・子ども用入り口



図8 1日のスケジュール

のが特徴で、これをムーミン哲学と呼んでいるとのこと。

保育園は平屋建てで、園内は清潔にしつらえられ、廊下も含め明るく子どもの作品や写真が飾られていた(図6、7、8)。部屋も通路・廊下もすっきりとした印象を訪問した者に与える。保育園といえば、1、2歳を含めた幼い子どもたちが生活し、泣き声や子どもの声があちこちから聞こえるのを予想するが、子どもたちが活動しているのに園内は極めて静かで、子どもたちの声の大きさが目立つことなく落ち着いた印象をうけた。

## (2) 学校生活に慣れるための準備教育施設

エシコウル(プレスクール)は、就学前の子ども、6歳児が、学校教育、学校生活に慣れるための準備教育施設である。最初に見学したクラスでは、子どもたちが「世界を旅行して回る」歌を順番に歌っていた(図9)。子どもたちは椅子の前に立って歌を歌い、女の子1人と男の子1人が、歌いながら歩いてグループの子みんなを回り、時々歌に合わせて立ち止まる。そこで対面した子に、世界の国々の挨拶を交わしていくのである。「ボンジュール」、「こんにちは」など先生とその国のことばで次々と挨拶を交わしていく。みんなの歌に合わせて楽しそうにぐるぐると回っていくのである。ルールを取り入れながら歌い、知識を学ぶ子たちは楽しそうで、かつ落ち着いている。じつと私たちを見つめる子もいて、日本人が来たことで興味関心をそそられている様子だった。



図9 楽しみながら学ぶ



図10 隣接する近くの森に散歩に行く

2つあるエシコウルのグループのうちの1つは、当日は朝9時半頃から森に散歩に行った(図10)。残る1つのグループの子どもは部屋で数の学習をしていた。学校入学の1年前から学校で学ぶことを準備し学習する。保育園児の年長児が、保育園に隣接するエシコウルにて学ぶ。廊下でつながっており抵抗感なく参加している様子だった。お昼寝をする部屋には、収納式のベッドが壁に作り付けられている(図11)。すべて木製で5割の保育園がこの収納式のタイプのベッドを設置しているという。昼寝の時間は約1時間である。中には昼寝をしない子どももいる。開園当時は園児の数は少なく、3グループだった。現在では、住宅が増えているので、就学前の2グループを含む、9グループを作っている。通常は20人で1グループを構成するが、支援が必要な子どもがいる場合は18人で構成する。寒さの厳しい冬も日数を減らし散歩に行く。

ランキョウ保育園は31年前に開園したが、ここ10年ほどで大きく変化し就学前教育は重視されている。現在では一変して92%の子どもがエシコウル(プレスクール)就学前学校に来ている。子どもには就学前教育を受ける権利はあるが、義務ではない。南フィンランドには、保育園を併設するエシコウルが多い。もちろん独立して学校を開設してもよい。

共働きが世界一多いフィンランドでは、保育園はとりわけ重要である。31年前は、2歳くらいから保育園に預けたが、今では産休明けすぐに保育園に預ける。入園する子どもの年齢は1歳く

らいからである。今流行のムーミンを題材として安全で冒険ができる遊びを考えすすめてきた。森の散歩も毎シーズン行っている。一回の散歩は約90分ほど。散歩の場所は決めてあり、そこを回る。このように教育方針はムーミン哲学がベースになっていること、園の保育活動には、父母の参加も募っているのが特徴である。保育園の子どもの数は、148人で、職員は43人いる。そのうち27人が教育学の有資格者である。このほかに食堂や掃除の職員が何人かいる。



図11 壁にセットされている木製ベッド



図12 先生の話聞く園児

各グループには有資格の教員を2名ずつ配置している。全員で5人の保育助手を配置する。つまり、1グループを教員2人、助手1人の3人が担当するということ。1歳から3歳までは、4グループに分け、12人から14人の子どもで一つのグループを構成する。その後、4歳、5歳、6歳児でグループを作る。6歳児は就学前学校の生徒として学ぶことになる。教職員用入り口と建物を挟んで反対側が父母・子ども用入り口である。子ども用入り口は何カ所もある。

園には教員が21人いるが、理想的には、1グループに「保育園の教員が2人+助手1人」配置されるのがよいのだが、現実には、「保育園の教職員1人+助手2人」の割合で配置になっているとのこと。助手の資格は、2年半の教育を受けることで、取得することができる。

保育園の教師は、免許を得るには大学で教育を受けなければならない。教員の早期退職は少ない。大学卒の資格を有する職業だからだ。保育園の教員の給与は安い、社会的地位は高い。フィンランドでは、結婚をして仕事を辞める「寿退職」の習慣はなく、保育が法律で決められているということは、母親がみな働いているということの意味している。

### (3) 身近な森から学ぶ

子どもが森を散歩することは、6歳児の子どもには、身近な森から学ぶこと、自然教育と自然科学を学ぶ両方の意味がある。森の妖精遊びなどもする。四季を通じて自然を観察でき、季節による変化を学び、動物や植物について実際に接して学ぶことができるという。子どものグループには、森にはそれぞれにとって決まった場所がある。指人形の「妖精」が森から出てくる遊びも楽しんでいた。

朝のスケジュールは概ね、7時～8時に子どもの登園、8時～9時には朝食をとり、9時からが保育である。保育をするには、親の理解が不可欠だと強調していた。親の中には雨が降れば「雨だから外遊びには行かない」と思う人もいるし、「泥で汚れる」と心配する人もいる。親が心配しても、子どもの外遊びは必ず励行する。雨が降ろうが、雪が降ろうが子どもは外で遊ぶことを好む。森の幼稚園ではないが、子どもの外遊びを重視していて、森への散歩と森での遊びは必ず実行する。保育園では、遊ぶことの中から学ぶからである。



### 3-2、エシコウルの実際：楽しく学習に慣れる

エシコウルでベテランの先生の実践を見せてもらった。



図13 「この数を学ぼう」



図14 椅子の背に紐の結び方を掲示

#### (1) 生活の中で楽しく自然に学ぶ

子ども18人、先生1人、助手2人のクラス構成だった。1, 2歳からこの保育園に通っている6歳児の子どもたちである。この時点ですでに4, 5年、園に通っていることになる。図13、図14にみるように、生活場面での数の理解、子どもが使う椅子の背もたれには紐の結び方がわかりやすくイラストで貼られ難しい動作に楽しく慣れ、楽しく自然に学ぶというのを目指している。先生が発する声も静かであった。

#### (2) 色彩感覚の重視

この保育園では子どもの色彩の感覚を大事にしていた。色彩がどのように変化するか。ガラス瓶で絵の具を混ぜて、変化する色を横から見る。先生の話では子ども自身がやってみようとするプロセスが大切だとのこと。「準備が大変。あとは子どもたちがやっていく。子どもが色彩遊びをしているときに、他の人が来て邪魔をしてはいけないという。あくまで子どもの自主性と自由な遊びを基本に色彩遊びを取り入れている。」とのことだった。

子どもが自分で遊び場を作る、そして自分で自由に遊びの場所を決め、材料を使い、遊ぶことが重要で、大人が一方的に介入してはいけないと語っていた。

#### (3) 積極的に可視化して追体験

野外体験・自然教育重視の教室には、夏に何をやったか、子どもが見てわかるように写真を貼っている(図15)。グループ学習では字が読める子もいるが、わからない子には教える(図16)。自分の庭を調べて絵に描かせたりする。さらに、発展させて、町にどんなに庭があるか調べてみる。野外学習の教材を廊下に掲示することもなされていた。夏に経験したことの作品が掲示されて、子どもが活動したことを可視化、目で再度追体験できるようになっていた。



図15 積極的に可視化



図16 グループ学習を補助する

#### (4) ランチルームで生活の自立の体験

ランチルームで昼食をいただいた(図18)。ランチルームは、どの園でもほぼ同じ形式とのことで、バイキング方式であるという。メニューは決まっています(図17)、各自がトレイとお皿、フォークとナイフを持ち、料理を自分に合わせた量だけ自分で盛り合わせ、テーブルに持っていき食べる。子どもたちは、はしゃぎ回る子もなく、静かに行儀よく食事をしていました。



図17 バイキングランチ



図18 ランチルームの様子



図19 食器の片づけ

園児は、グループごとに交代でランチルームに食事に来ていた。年齢にもよるのだろうが、食べた食器は、子どもが自分でかたづけていた(図19)。これも園児の教育の一環として、生活の自立につながると考えていた。

#### (5) 個人の記録の作成と活用

エシコウルでの個人の記録は視覚的にも明らかになるようにいねいにファイルされていた。1冊ずつの紙ベースの記録、ドキュメンテーション(図20)と電子データ(図21)での他機関と共有できる記録、双方を活かし、次の支援に切れずに継続してつなげていくことを可能にしていた。



図20 個人の記録を紙データでファイル



図21 作品を電子データでファイル

## 4. おわりに

フィンランドの育児休暇では、産前1か月、産後9か月の有給休暇が認められている。その後、子どもが3歳になるまで、2～3年育児休暇を取り、職場に復帰する権利がある。保育園・施設に子どもを預けないで、自宅で子育てする家庭もある。自治体としては家庭保育の場合にはその家庭に育児手当を支給する。この支給制度は自治体の経済状態によって異なる。フィンランドは国の仕組みが日本とは基本的に大きく異なる。地方自治体の権限が大きく、教育や福祉サービスは各自治体の責任のもとで実施する。福祉国家には3つのタイプ(リベラル型・コーポラティブ型・



ユニバーサル型)があり、日本は、多くのヨーロッパ諸国が属する第2の型に近く、市場の力に任せるアメリカを代表にしたリベラル型より国の負う責任割合が大きい。フィンランドは、第3の北欧型に属し、公共政策の範囲が広く、国に課される責任が大きい。国と地方自治体の役割分担が明確で、国は年金給付などの所得保障を行い、自治体はサービスを担当するのが原則である(山田, 2005)。地方自治体は、住民にサービスを提供する中心である。主に3種のサービスがあり、①教育と文化のサービス、②社会福祉・保健のサービス、③環境、インフラ整備、土地利用、給水、エネルギー、ゴミ処理等のサービスである。

「子どもたちは十分な教育を受ける権利がある」など、「権利」ということばがどこでもきかれる。北欧の国々は、福祉の国といわれるが、人間観・社会観が、日本を初めとする先進「資本主義」国とは全くといっていいほど違う。高い税金は、不均等な「所得の再配分」の意味が強く、誰もが対等に平等に社会に支えられる感が強い。1990年代の改革で、教員養成のあり方も大きく変わった。教員資格は、5年間の学部・大学院の一貫教育によって付与される。前半は、3年間の学部教育で、後半は2年間の大学院教育である(ヘルシンキ大学教員養成プログラム参照)。学費は無料である。

フィンランド自体も、失業率が高く、若者が適当な就業先を見つけるのはなかなか難しい。小さな国で資源に乏しいフィンランドは、長期的に見ると国の資産・財産になるものは人であり、教育こそが重要な役割を果たすという考えがベースにある。単純に同型モデルを当てはめることは適切ではない。しかしネウボラとエシコウルの特徴からは、他機関との間で継続した支援が可能になること、継続し活用される子どもと家族の支えのしくみによって子どもと家族のリスク予防につながることが示唆された。またこのリスク予防によって家族の安心感を醸成し、人々の健康を保障することに価値をおく考え方からは多くを学ぶことができる。

#### 引用および参考文献

- ・山田真知子 2005 働き方で地方を変える、フィンランド福祉国家の取り組み、婦人の友社
- ・リッカ・パッカラ 2008 フィンランドの教育力—なぜ、PISAで学力世界一になったのか、学習研究社
- ・高橋睦子 2010 フィンランドの子育て、教育と医学
- ・藤井ニエメラみどり他 2007 フィンランドの子育てと保育 明石書店
- ・<http://www.helsinki.fi/en>

(2015年3月28日提出)

(2015年6月3日受理)

# **The feature of the education in infancy and the support of child rearing in Finland focusing on the continuous support ; neuvola and esikoulu**

**Haruna YOSHIKAWA**

**Keiko OZAKI**

**Tomio HOSOBUCHI**

This report is to make clear for the feature of the engine of child's education and child rearing support before study in Finland.

Ways are an interview to a nurture person and the person in charge and an inspection of the school and a nurture situation in September, 2013. This report was studied about neuvola and esikoulu. As a result, neuvola showed that we have the continuity of the use, the continuity of the person in charge, the child rearing support base function of the area and the function in which we take the certain leading part in the child rearing support participation in school welfare team took over and by which it's an area through long continuation to another agency. Such as it was emphasized to enjoy oneself in esikoulu again, and emphasis of the color sense accustomed to school was visualized, and experiencing it vicariously and aiming at living independence by lunchtime, we found out the function as the preschool.

**Key words:** Finland, continuous support, child-nurturing support, neuvola, esikoulu